

見つめる目 しなやかな心 医療を支える 看護の手	看護部だより	2014年 2月号 第274号	特定医療法人衆済会 増子記念病院 看護部 部長 上村 志磨子 (認定看護管理者)
--------------------------------	---------------	-----------------------	--

「ゆとり世代」と「ロスジェネ世代」

世代間の違いより個人の本質を!

第2透析室 看護主任 西田 歩

2014年も始まり、もう、1ヶ月が経ちました。世間では大学入試センター試験も始まりました。看護学生の中には、これから迎える第103回看護師国家試験に向け、勉強も追い込みの段階にきていることと思います。私も10数年前、国家試験に向け、毎日、何十時間も勉強し、苦しい日々を送った記憶があります。「なぜここまで勉強し、資格をとらなければいけないのか?」。毎日、自問自答をくりかえしていた気がします。

1 競争を意識して成長する

しかし、その時も現在でも、明確な答えはなく、「なぜ看護師資格を取得しようと思ったのか」、はっきりしません。ただ、自分の人生が少しでも前に進むために必要だったから、あの時、絶え間ない努力を試験に注げたのかもしれない。

看護師として、人として、世間に認められたい、家族に安心してもらいたい、進歩しなければ周りは認めてくれない、そのように感じていたのかもしれない。

それは、いつの間にか他者との比較、競争を意識し、努力するようになっていました。兄弟や周りの人達とのさまざまな比較、競争を経験し成長してきたのだと思います。

2 「世代間の違い」はあるのか

今年センター試験を受験する学生は、いわゆる、「ゆとり世代の最後」と言われているそうです。「ゆとり世代」の方々は、競争や比較をあまりされず成長してきているとよく聞きます。

本当にそうなのでしょうか。世代により物の考え方、取り組み方に違いがあるのでしょうか。接遇の研修などでも、「世代を理解し対応すると良い」という話も聞いたりします。それは、とても興味深いです。そこで、私の世代と、「ゆとり教育」の世代とに違いはあるのか、私は、少し調べてみました。

3 「ロスジェネ世代」

「ロスジェネ世代」という世代があるそうです。色々調べてみると私はこの世代だそうです。

ロスジェネとは、ロストジェネレーションと言い「失われた10年」の時期だそうです。ある国、あるいは、地域の経済低迷が約10年以上の長期にわたる期間を指す語だそうです。

世界では、第一次世界大戦直後などが当てはまり、日本では、1991年から2002年までの約11年間の期間を言うそうです。この低迷した氷河期世代には、安定した職に就けず、派遣労働やフリーター

といった社会保険のない不安定労働者が非常に多いそうです。

大卒時に就職氷河期であった1970年から1982年に生まれた人々もこの世代にあげられます。周りからは、「いい学校を出て、いい会社に入る」など言われ詰め込み教育を受けてきたが、移行途中で行き場を失った(ロスト・イン・トランジョン)世代ということです。

4 「ゆとり世代」

一方、「ゆとり世代」について見てみます。「ゆとり」の語源は、日本教職員組合(日教組)が1977年に学校5日制を提起し、1980年から適用された学習指導要領において「ゆとりと充実」と言うスローガンを掲げたことに由来します。授業時数の削減が行われた「ゆとりカリキュラム」とあります。

しかし、世に言う「ゆとり世代」と呼ばれるのは、このカリキュラムとは別です。1999年に全面改正され、施行された2002年度以降に入学した小中学校を対象とした学習指導要領のカリキュラムを受けた者を指すそうです。今までの総授業時数を3割削減し、その分、考える時間に能力を費やし「考える力」をつけ、「変化の激しい現代に対応できるようになる」などの目的がありました。しかし、その結果、目標を持って勉強する子、しない子に二分化される傾向を生んだのです。2002年に8~14歳であった世代以降がいわゆる「ゆとり世代」ということになりそうです。つまり、現在、20歳代前後である世代ということでしょう。

5 個人の本質の違いに視点を

「ロスジェネ世代」と「ゆとり世代」では、何らかの違いはあると思いますが、目標に対しての取り組みの違いはないような気がします。目標を持って努力する人、しない人は、どの世代でもいることで「ゆとり教育」はそれがはっきり分かれてしまっただけのことかもしれません。目標を達成しようとする過程で、競争、比較を糧に努力してきた人も、きっと沢山いただろうと思います。

世間的には、「ゆとり世代」については、色々なネガティブな意見が出ていますが、本当にそうなのかどうかは、その世代にしか分からないこともあります。世間の「決めつけ」が、この世代のやる気をなくすことにもなるかもしれません。

世代の特徴を知るとは、大切なことかもしれませんが、まずは、世代に関わらずその人の本質を知ることが大事なことです。

私も色々な世代の方々と仕事をするところがあると思いますが世代を意識せず接していきたいと思っています。

6 先入観を持たずに

最後に、今回このテーマで書かせて頂いたきっかけは、最近、自分が「人や物事を決めつけて話してしまう」ということを指摘されたからです。これを戒めとし、これからの仕事を取り組んでいきたいと思っています。これを読んでまた、私の上の世代の方々(団塊、団塊ジュニア、バブル世代?)からのご指摘もあると思いますが真摯に受け止めて努めていきたいです。

※参考文献「失われた場を探して-ロスジェネレーション社会学-」 著者/メアリー・C・ブリントン、池村千秋(訳)

以上

学生コーナー

責任を持つということ

4階病棟学生 田川 優粋

高校を卒業し、増子記念病院に入社して2年という年月が経ちました。仕事と学校の毎日のため時間が過ぎるのがとても早く感じます。この2年間の間に様々なことがありました。

私が一番印象に残っているのは、去年の実習です。

セルフケア不足の患者さんへの看護を行うことが目標の実習で、情報収集を行い看護過程を展開し、計画を実施して評価をしました。何度やっても看護過程は難しく、看護師になるための道は険しいものだと改めて感じることができました。

仕事もそうですが、患者さんが笑顔を見せてくださると、こちらまで嬉しくなり、仕事と学校の毎日は辛く感じますが、頑張ろうという気持ちを思い出させてくれます。

私は、人と関わることが上手くないほうです。しかし、増子記念病院に勤めて患者さんと関わっていくことで、必然的に会話をしたり患者さんの身体に触れたりするので、人との関わり方が少しずつですが上達しているように感じます。

9月に行った実習の中で実習担当の看護師から「この人のことは、今後どの実習に行っても忘れずに思い出すでしょうね。」とおっしゃっていただいた患者さんがいます。その方は胃癌の末期の方で、家に帰って最期を迎えることを強く希望されていた方でした。

私が受け持たせていただいたのは、平日の朝9時から夕方の16時までの間で、2週間という短い期間でしたが、日に日に衰弱していく患者さんを見て、患者さんの思いを聴いて、何度も目頭が熱くなりました。

患者を受け持つということは、責任が重く、一番患者さんに近い看護師であることなのだと感じました。

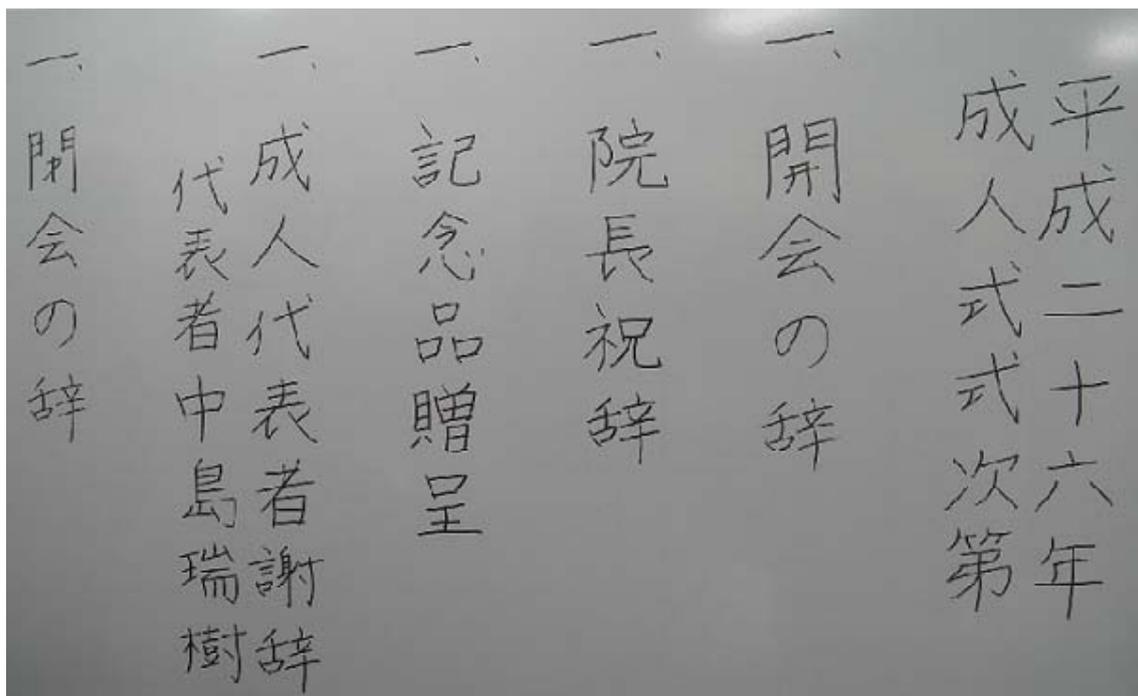
先日、成人式に参加するために休みを頂き、地元の長崎へ帰りました。実習のときに、来年成人式だと話すと患者さんが振袖の写真をみたいな・・・とおっしゃっていたことを思い出しました。

また、久しぶりに友人に会うと、みんなそれぞれの道で頑張っていて、自分も名古屋に帰ってからの仕事と学校の毎日を頑張ろうと思えた帰省となりました。

以上

※ 今年は全国的に寒い冬になっているようです。北海道では-30℃とかの記録的な低温に見舞われているそうです。アメリカ合衆国の北部地域では、凍死する人も相次いだと報道されていました。一方、オーストラリアでは、40℃を越す猛暑に見舞われているそうです。これらは異常気象なのでしょう。例えば、わが国も今年の夏は、猛暑であって、竜巻の発生やら集中豪雨やらで、大きな被害が出たのでした。人類は、いま、自然のパワーを見せつけられ、「お前たち、いい加減に目覚めよ」と諭されているのかも知れませんが、「奢ることなかれ。目先の利益より未来の安寧を」と。

増子記念病院 院内成人式



2014年1月20日(月)8時30分より仮設会議室において、院内成人式(新成人8名)が厳かに執り行われました。式次第は写真のとおりです。黒川剛院長から新成人に対し、「成人となったことを祝福します。勉強と仕事の両立で大変ですが頑張ってください」との祝辞があり、新成人を代表し、中島瑞樹さんから答辞が読み上げられました。



答辞

本日は成人を迎えた私たちの門出に、このような盛大な式典を催していただき、誠にありがとうございます。また、お祝いや激励の言葉を頂きました院長をはじめ、ご来席いただきました皆様に、新成人を代表して、心より感謝申し上げます。

私たちの多くは高校を卒業してすぐに名古屋へとやってきました。希望や不安など、様々な感情を抱きながら、この増子記念病院に入社しました。早いもので、もう2年が経とうとしています。環境の変化や学校と仕事の毎日に追われ、忙しい日々の中で、それぞれが壁にぶつかったり、悩んだりすることもありました。

しかし、こうして今私たちが今日まで頑張ってきたのは、職員の方々や先輩、同期をはじめとする周りの方々の支えがあったからです。

まだまだ、未熟ではありますが、成人という門出を迎えた今、一人の大人としての自覚を持ち、責任ある社会人として歩んでいきたいと思えます。自己の目指している看護師に妥協することなく、努力していきます。どうかこれからも暖かい目でご指導、ご鞭撻いただきますようお願いいたします。ここで申し上げたこと、皆様から頂戴した言葉を胸に刻み、これからも日々精進していきたいと思えます。

簡単ではありますが、新成人を代表してのご挨拶とさせていただきます。

本日は誠にありがとうございました。

平成26年1月20日 新成人代表 3階病棟 中島瑞樹



新卒看護職員研修を終えて⑤

(2012年4月入社)

沢山の方々の支えの元実施することが
できている

第1透析室 高宮雄渡

新卒看護職員研修では、透析室、病棟、外来、手術室、訪問看護ステーション、検診センター、放射線科、検査課、薬局、栄養課、リハビリテーション科、医療福祉相談室、医事課と様々な部署を回らせていただき様々なことを学ぶことができた。透析室と病棟以外は研修期間が短かったが、それぞれの部署で何をやっているのかということなど、それぞれの部署の特徴を理解することができた。

特に手術室では、実際にシャントオペなどの手術を見学させてもらうことにより、今まで漠然としていたシャントの構造や人体の解剖について学ぶことができた。訪問看護ステーションでは実際に利用者のご自宅に訪問させてもらい、利用時間内に利用者が望んでいる看護をいかにして提供していくかということを考えさせられ、学ぶことができた。

病棟では学生時代も実習を行わせていただいたが、その時とは全く違う責任感の重さを感じた。

また、一つ一つの技術や看護についても自分の知識のなさを実感させられて、もっと勉強をしていかなければならないと感じた。透析室では学生時代には学ぶことのなかった初めての看護が多く、穿刺についても緊張の連続で、たくさんの患者さんに腕を貸していただき何度も失敗を繰り返しながら成長することができた。

透析室では患者さんのいる限られた時間の中で看護を行っていくということの大切さと同時にその難しさを感じた。様々な部署の研修を通して、増子記念病院はそれぞれの部署とのつながりがとても強いと感じた。その中で短い間だったが、顔と名前を覚えてもらうという意味でもとても良い研修になった。

研修期間中は何をどのようにしてやっていいかわからないことばかりで、日々の業務と看護を覚えることにいっぱいだった。しかし、周囲のスタッフや患者さんからの暖かい声掛けが頑張ろうという励みとなり、無事研修を終えることができた。

新卒看護研修は沢山の方々の支えの元実施することができていると実感した。新卒看護研修を終えて改めて研修に携わっていただいた沢山の方々に感謝したいと感じた。

以上

連載: がん闘病記 ①

えっ! ステージⅣ?

手術室 打田潤子

1 はじめに

ステージⅣと聞いて、これが他人のことなら、「へえ〜大変だね」と思う。ところが自分のこととなるとちょっと違ってくる。術前の説明で、CT画像を見ながら、「こことそれにここ」などと説明されてもピンとこない。手術を終えた今も、「腹膜播種か」とお腹をなでながら「静かにしててよ」と思うくらいだ。現実であるがまだ夢の中のようだ。寿命はそれが終わる時まで誰にもわからないのだから、良い方に考え、化学療法が功を奏すると信じよう。

今回、がんセンターに入院して術後4〜5日を過ぎた頃、どうにもこうにも書かずにはいられなくなり、是非にと投稿をお願いした。

どれどれと読んで頂ければ幸いである。

2 それは暑い夏に始まった

今年の夏は異常に暑かった。エアコンなしでは干上がりそうだった。そんな8月、いつものアフターファイブ、ミスドへの道がやけに遠かった。足が進まない、そんな感じが毎日のように続いた。「この暑さのせいだ。」そう思いながら、9月を迎えた。

3 不正出血

9月に入ってすぐ、不正出血が始まった。2日目に駅西の某産婦人科を受診した。結果は「閉経してもたまにあるんですよ」という答えだった。そして、2週間後にまた来て下さいと言われ、その通りに再受診した。エコーの結果は、「筋腫は小さくなっている大丈夫」と言われた。

3 子宮体部の腫瘍

「念のため、子宮頸部と体部の組織をとって検査しておきましょう」と言われ、再度1週間後受診した。結果は体部の腫瘍が疑われ、特に希望の病院がなければと、本郷のKクリニックを紹介された。元がんセンターの医師だった方だそうで、今思えばこの医師の手早い処置のおかげで、がんセンターへの道が段取りよく運んだ。

Kクリニックを受診したその足で、タクシーでワンメーターのS病院へ行きMRIを受けた。ここの技師さんは非常に気遣いがあり安心して検査を受けることが出来た。木曜日再度Kクリニックを受診、MRIの結果を聞いた。エコーでも右卵巣が大きくなっているのは明らかだったが、MRIでも見事に下腹部を占めている大きな物体があった。K医師から「明日、がんセンターに行けるか。僕からがんセンターのN先生に連絡をしとく。この紹介状とCDを持って診てもらいなさい。遅くなるかもしれないけど、必ず診てもらうんだぞ。いいか。」

4 ガンセンターへ

翌日、勤務は休みをもらい、9時には受付を終えた。N医師は今日オペ日ということで、14時は過ぎると言われた。私はなるほど、待つしかない、手続きを終えて、長女の家で休んでいた。がんセンターに戻り、昼ドラと大奥の再放送が終わった頃ようやく診察のめどがついた。持参したMRIの画像を見てうーんとうなるN医師。私はやっぱりと半分覚悟した。

「手術の日を取っておかないとな」と言いながら予定表を見て、「11月2週目か3週目」と言われた。それまでの間、CT(これは他の臓器への転移を見るため)、MRI、胃カメラ、注腸、心電図、肺機能検査とオペに必要な検

査の数々を行った。

5 猛烈な腹痛

9月から始まった病院通いの間、私自身の自覚症状も変化していった。

9月14、15日の2日間趣味で習っている能面教室の展示会があり、受付に座っていた。まず、昼ごはんがいつものように入っていかなかった。食欲が出なかった。2日目、さらに疲れが溜まり、帰宅の足が重たかった。翌日から微熱が出るようになった。4、5日は風邪症状があったため、風邪をひいたと思っていた。しかし、風邪症状が治まったにも関わらず、この時から、オペまで微熱は続いた。正確に言うと、オペ後はもっと高い熱が出たが、オペ後点滴が抜けるまで微熱は続いた。

ロキソニン朝・晩と欠かせないようになった。そして3度目の某産婦人科を受診した翌日、早朝4時頃、猛烈な腹痛に襲われた。痛い痛いと言いながらそれでももうとうとうとらしく気付けば6時、痛みはかなり軽減していたが残っていた。

6 「いつもよりまずい」

10月に入り、症状は落ち着いているようだったが、腹部は少しずつ大きくなっていった。オペ日が11月6日と決定したがそんな矢先の20日、日曜日、朝6時頃トイレで排尿後、急に気分不良と共に頭から血の気が引く感じがした。私は「いつものだ」と思いつつ、「いつもよりまずい」と思い、「外へ出ないと」と思った次の瞬間、意識を無くしていた。

気付いたのは長男の「お母さん、救急車呼ぶ？」という呼びかけだった。一瞬、「どこに寝ているんだろう」と思ったが、どうもトイレの外の廊下だったようだ。再度「お母さん、救急車呼ぶ？」と聞かれ、「うん」と答えるしかなかった。

7 救急車で

身体はえらくて動かさないし、お腹が痛い。長男の嫁が腰に何かを掛けてくれた。すぐ救急車はやって来た。「掛かり付けの病院は」と聞かれ、「今、がんセンターの婦人科のN先生に診てもらっています。」と答える。まもなく上半身と下半身を抱えられ何かに乗せられた。外は雨だったらしく、雨の音がしていた。名古屋高速で30分程であるが、私の口から出るのは痛い痛いという言葉だった。

がんセンターの婦人科病棟に入院となり、早速ルート確保となったがどうも血管がよく出ないらしい。とりあえず採血し、左手背でルートは取れた。気分も落ち着いてきた。

8 どうしてこんなにお腹が大きくなるの

気がつくのと、どうもお腹が大きくなっている。2泊して退院となったが、元の服が入らない。長男夫婦が赤ちゃんデパート水谷でマタニティのズボンを買ってきてくれた。これがぴったりであった。「何で急に妊娠8ヶ月のお腹になるの」と思っていたが、何やら腹水も溜まっている気配がする。入院前の1週間はさらにお腹は大きく臨月のようになっていた。肋骨が押し上げられて痛い。両側の大腿から下腿全体の浮腫がひどく、オペ日が待ち遠しかった。入院は2週間くらいだと聞いていた。そして、待ちに待ったオペ入院の11月3日がやって来た。

(以下次号に続く)